

まちづくり ひろしま

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

第27号 (平成29年1月15日)

読者数：570名 (募集中)

メール：hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

□ 巻頭言

世界の中の広島

ひろしまジン大学学長
平尾順平



「都心活性化プラン (仮称)」策定のための懇談会に、大学の先生方や、まさに都心で事業を展開されている方々の末席に、市民の一人として加えていただいている。この懇談会、初めてお聞きになる方もいらっしゃると思い、広島県のホームページからちょっと言葉を拝借。

人口減少や東京一極集中が進む中、広島県が持続的に発展していくためには、広島都市圏の求心力と活力の源である広島市都心部の活性化を図る必要があります。

そのため、広島県では、広島市と連携し、都心の中枢拠点性を高める取組を進めています。国内外の人々や企業などを惹きつける都心の魅力向上や質の高い都市環境の整備などに取り組み、都心を活性化するため、中長期的な視点で広島市都心部の目指すべき姿や将来像、その具体化に向けた施策などを示す「都心活性化プラン (仮称)」を平成27年度、平成28年度の2か年をかけて策定します。
(<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/toshin-plan/>)

昨年は5年に一度の国勢調査の結果が発表され、前回調査に比べ、39の道府県で合計97万人減少。減少は1920年の調査開始以来、初めてのこと。そして、2050年には、日本の総人口は1億人を切ると試算されている。そしてすでに始まっている少子高齢化。

そんな日本において、広島の中心部はどうあるべきか、その将来像、そしてそれに向けての軸となる方針を考えていくのが当懇談会と理解している。

例えば、被爆後100年にあたる2045年。

例えば、被爆後150年にあたる2095年。

その時、どんな広島であるべきか。どんな広島でありたいか。

そこを見据えたうえで、逆算的に、今、これからを考えていく。

ビジョンなく、「今」を起点に、あったら便利！という「現在のニーズ」だけをつなぎ合わせた街は、いつの間にかどこにでもある、個性のない姿になってしまう。

学生時代はバックパッカーとして、大学卒業後はサラリーマンとして多くの国を歩いた。その際、どこから来たんだ？と聞かれると「Hiroshima」と答えるようにしていた。すると一瞬の沈黙と同時に、「あの広島か！？」というリアクションが返ってくることが多かった。

「あの広島」が意味するところは、もちろん71年前の広島。学校等で習ったという、そのイメージは強烈である。

一方で、彼らがその後の広島のイメージをほとんど持ち合わせていないことが気になった。いわば、広島が「アップデートされていない」。

未だに木が生えてないのではないか？そもそもお前はどのようにあの街からくることができんだ？など、冗談なのかと思わせる質問も数多く受けたのを思い出す。

この街の「今」は、ちゃんと世界に発信できているだろうか。世界の期待に応えられているだろうか。

目先の利益、短期的な成果に目が行きがちな今だからこそ、長期的に、子や孫の代の人たちに、じいちゃんたち、いい街を作ってくれたね！と言われる街にしたい。そして、在り方自体が「平和」の一つのカタチとして、世界に示していくことができる街に。

今、人口減に伴い日本のほとんどの都道府県で移住・定住施策が行われている。しかし、それは一步引いて見れば、国内で徐々に小さくなっていく「パイの奪い合い」であるのも事実。そんな今だからこそ、改めて、日本の中の一地方都市「広島」としてだけでなく、世界における「広島」という視点で、この街のこれからを考えていきたい。

この街は『世界の広島』として、新たな価値観を発信できる可能性を持っている。そんな想いをもって、この懇談会に出席させていただいている。

ひろしまのまちづくりの動き

① 広島西飛行場跡地活用の動き

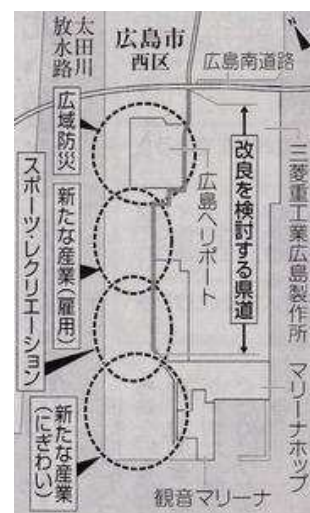
広島県と広島市は広島西飛行場跡地の活用方針の概要を公表。北側から順に広域防災、新たな産業（雇用）、スポーツ・レクリエーション、新たな産業（にぎわい）の4つのゾーンに区分け。

南端に水陸両用機の運航拠点とスポーツ・レクリエーションゾーンに広島カープの寄付金を充てた少年野球などができる公営運動場を整備することがほぼ確定している。

新たな産業ゾーンに何を整備するかは企業など4者の提案を基に検討がなされ、にぎわいのゾーンにはマルシェ（市場）やホテル等を誘致し、雇用のゾーンには民間の研究開発施設等への売却用地を整備する方針。年度内には活用計画をまとめて誘致する事業者を改めて公募する予定。

疑問に思うのは新たな産業（雇用）のゾーン。ニーズはあるのか？この地でなければならない必然性はあるのか？公共用地を安易に企業に売却していいのか？県・市の財政事情も分かるが、民間に売却する場合は多くの市民に利用可能な用途を前提にすべきではないのか？

瀬戸内海を遊覧飛行できる発着場や瀬戸内の農産物・海産物を売りにしたマルシェ、隣接するマリーナホップや観音マリーナと一体となったリゾートホテル等の計画には賛同できる。次世代の子供たちに夢と希望を与えられるような統一テーマを持った開発を望みたい。



中国新聞(2016. 11. 26 付)

② 比治山「平和の丘」構想の基本計画素案公表

広島市は比治山公園を「平和の丘」として再整備する構想の基本計画素案を公表。被爆70周年の記念事業と位置づけ、2017年度から市街地を一望できる展望施設などを段階的に整備する。

日米の共同研究機関「放射線影響研究所」は市総合健康センターへの移転が検討されており、移転が実現すれば跡地に芸術作品を設置するなどの多目的エリアを整備する。

市は国際平和文化都市として復興した広島の『今』を実感できる新たな拠点を整備したい意向。市民から意見を募集し、3月中に基本計画を策定する予定。

現状は丘の上でアクセスが悪いが、すでに市の現代美術館やまんが図書館があり、陸軍墓地や被爆建物の山陽文徳館など歴史的な施設も残っている。比治山全体が『平和の丘』として整備され、バス路線が丘の上まで行けば、立派な観光名所になりうる場所と思う。

比治山公園「平和の丘」構想：

<http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/70th/contents/1436773109550/files/heiwanookakousou.pdf>

(新聞報道より)



中国新聞(2016. 12. 15 付)

○ 広島復興の軌跡・人物編 (第2回) ～原爆市長 浜井信三～

原爆市長とも呼ばれる浜井信三の戦後の生き様は、まさに広島復興の軌跡そのものと言える。1945年8月6日、原爆投下により一瞬に廃土と化して数万の人が死に、年末までに約14万人が亡くなった。その時、広島市の配給課長だった浜井は食料品や生活物資の調達のために奔走する。公務員の多くは身内に被爆者を抱えながらも私事より公務を優先させたのだ。



当時の栗屋仙吉市長は自宅で即死。木原七郎新市長が10月に就任し、浜井は12月に助役となる。復興の仕事が市政の中心となるため1946年1月に復興局が新設され、2月に復興審議会が発足。そこで百メートル道路等の街路計画と中島公園や中央公園等の公園緑地計画を決定。

百メートル道路は市内のほぼ中央部を東西に横断するが、大幹線道路というより防災空地、特に緑地帯として計画された。後に工事が進み、姿があらわになると、こんなに広い道路がなぜ必要なのかと多くの批判にさらされることになる。

中島公園は被爆者の霊を慰めるとともに史上初の被爆都市として平和を希求する場にしようと計画されたが、急場をしのぐ市民のバラックが密集していく。

浜井市政の発足

木原市長は在職1年半で公職追放により退職。1947年4月、公選第1回目の市長選挙で浜井が当選。41歳の青年市長が誕生し、復興途上の不安定の中、「市政の民主化」「市民生活の安定」「復興都市計画事業の推進」の3本柱を重点施策としてスタートする。

戦後、すさんだ気持ちを奮い立たせるために市長は仲間たちと『夢を語る会』を結成していた。メンバーの一人から「市民の平和意識が高まってきたから平和祭をやろう」という提案があり、次第に共鳴を広げていく。市長はその年の第1回平和祭式典で広島市民の世界平和を確立する決意として平和宣言を全世界に訴えた。

広島平和記念都市建設法の成立

復興計画を裏付ける財源がなければ絵に描いた餅となる。財源を求めて国や各方面に働きかけたが、全国各地が同じ状況にあり、広島だけを特別扱いすることは容易ではない。

市長は在京の学友たちに意見を求めた。政府各省の官吏たちもいて、事務的な手続きでは無理だから、政治的に国会へ働きかけるのが早道だということでき一致。そこで広島の復興は国家的な意義を持つという大義名分をかざして、議員立法による特別法(憲法第95条)の制定を目指す。市長が先頭に立ち、法案を起草した広島市出身の参議院議事部長寺光忠氏や任都栗司市議会議員の獅子奮迅の活躍、県選出の国会議員等々の尽力により、1949年5月に広島平和記念都市建設法が衆参両院において満場一致で可決された。

この法律の最も大きな意義は、「恒久の平和を実現しようとする理想の象徴として広島市を建設する」という崇高な精神が明文化されたことである。それにより国からの復興補助金が増え、旧軍用地の無償譲渡の道が開かれ、復興事業に弾みがついた。また、この法律の制定の動きにより、隅に追いやられていた中島公園の計画が息を吹き返し、名称も「平和記念公園」となる。

8月6日、この法律の公布日に平和記念公園設計コンペの結果、東大助教授丹下健三氏グループの当選を発表。1950年度から予算化されたが、順調に進んだわけではない。建設省の補助対象として平和記念館と原爆資料館は認められたが、予算不足のため原爆資料館は規模縮小に追い込まれた。だが、市長は中途半端なものを作って将来に禍根を残してはいけないと思いとどまり、とりあえず丹下案の躯体工事だけを先行。中断しながら4年半かけて1955年8月に完成。

公会堂は補助対象とならず、当面空地として残すことになる。1953年の正月、ラジオ中国で『夢を語る』という市長を交えた座談会があり、財界のメンバーが「年来の夢は広島に立派な公会堂とホテルと物産陳列館を作ることだ」と発言。この放送がきっかけとなって地元財界(二葉会と称した)からの寄付により、ホテル機能を備えた公会堂として1953年11月に着工し、3館の中では最も早く1955年3月に完成した。



公会堂(1955年3月)

慰霊碑は1952年に完成し、この年から平和記念式典をこの地

で開催するが、慰霊碑の北側には多くの民家が残っていた。民家を完全に取除いて跡地を植栽し、平和記念公園として体裁を整えたのは1959年の式典からである。

3期目よもやの落選

浜井市政も2期目を無事終え、1955年に3期目の選挙を迎える。対抗馬の渡辺忠雄候補は「百メートル道路幅を半分にしてアパートを建てる」「不法建築に対して強制的に退去させるような非情なことはしない」等を強く訴え、住宅不足や立ち退き等の区画整理事業に不満を持つ人たちの支持を得て、僅差で当選。ポピュリズムに敗れた浜井は下野し、一市民として過ごす。

新市長公約の百メートル道路の用途変更は部下の必死の説得により断念し、その代案として中央公園の区域を半減して住宅用地に転用。渡辺市長時代の実績としては供木運動、市民球場完成、復興大博覧会、基町中層アパート建設等あるが、強制執行はしないという公約に縛られて、区画整理等の復興事業はほとんど手つかずの状態となった。

奇跡の振り返り

1959年の市長選には背水の陣で臨み、現職を大差で破って振り返り、3期目と4期目を1967年まで務める。その間、残った復興事業の完遂と大規模地方開発都市としての新たな施策に着手。1966年には猿猴川河岸緑地の整備のため広島市として初めての場地区の不法建築を強制撤去し、後に基町の原爆スラムの一掃から高層アパートの再開発事業へと展開していく。

原爆ドームの保存については賛否両論あったが、時の経過とともに被爆の証人として平和を訴えるために残すべきという世論が高まる。1966年に市議会は原爆ドーム保存の要望を決議し、広く国民からの募金を呼びかけた。市長も自ら街頭に立ち、目標の金額を達成し、1967年の保存工事完了を見届けるかの如く1968年2月に急逝する。(享年62歳)

被爆後の筆舌に尽くしがたい修羅場を潜り抜けた人のみが持ちうる底力と被爆で亡くなった人たちの無念の分まで生きていかねばという執念が原爆市長たる由縁ではないかと思う。

*参考資料：原爆市長 復刻版（著者 浜井信三）（編集委員 瀧口信二）

□ほっとコーナー

『この世界の片隅に』

パーソナリティ 三浦ひろみ

明けましておめでとうございます。新しい年が心温まる年となりますように！

お正月といえば、お正月映画ですが、今年は広島の皆様には是非ご覧いただきたい映画があります。公開より話題を呼んでいる「この世界の片隅に」です。

広島出身で「夕風の街 桜の国」の作者こうの史代さんの原作を、「マイマイ新子と千年の魔法」の片渕須直監督が熱望してアニメーション映画化。

舞台となるのは、昭和8年から終戦を迎える20年頃。広島江波から呉へと嫁いだ一人の女性すずさんが、戦時下で工夫をしながら一生懸命に生きていく様が時にユーモアも交えつつ描かれています。呉にあんなに空爆があったことや、戦時下の人々の思いを改めて知ることができました。すずさんは、絵を描くことが好きな、おっとりした女性ですが、様々な苦難を受け止め、苦悶しながらも前へと進みます。普通の人々、一人ひとりがこの世界の片隅で懸命に生きていることが、いかに素晴らしく、尊く、たくましいことか。市井の人々への賛歌でもあります。

そして、広島・呉ゆかりの人々にとってはかけがえのない贈り物とも言える映画です。監督は度々広島や呉の地を訪れ、肌で空気を感じ綿密なリサーチのもと当時の風景・生活を蘇らせています。女優の「のん」さんは、すずさんの声を見事に演じきりました。おりづるタワーで行われた記者会見時、監督と共に現れたのんちゃんは、以前にも増して自然な輝きを放っていました。



クラウドファンディングで全国のサポーターから制作資金を集めての本作。多くの人々の熱い想いの結晶でもあります。永遠に愛され語りつがれる映画「この世界の片隅に」是非ご覧下さい！

©こうの史代・双葉社／
『この世界の片隅に』製作委員会

基町プロジェクト・シンポジウム2016

○ 広島基町高層アパートと大高正人

1978年完成してから40年近くが経過し、建物の老朽化、少子高齢化、地域コミュニティの活力低下等の諸課題にどのように取り組むか、基町高層アパートの設計に携わった大高正人の仕事を振り返りながら、パネラーによる活発な議論がなされた。

主催：広島市立大学、広島市中区役所

日時：2016年11月12日（金）14:00～17:00

場所：広島市立基町小学校体育館

登壇者：石丸紀興（広島諸事・地域再生研究所代表） 藤本昌也（現代計画研究所会長）

小林礼幸（広島市都市整備局基町住宅担当課長） 司会 松隈洋（京都工芸繊維大学教授）



パネルディスカッション

☆ 基町高層アパート建設までの歩み（石丸）

昭和21年に戦災復興都市計画で中央公園を決定したが、住宅不足に対応するため応急の公営住宅を建設。昭和31年に中央公園区域の一部を用途変更して中層アパートの建設を開始。河川敷まで密集した不法住宅を一掃し、公園に戻すため昭和44年に再開発事業を採択し、基町高層アパートの建設に着手。

「今の基町は影が薄い存在になっていないか」という問題を提起。

☆ 基町高層アパートの計画（藤本）

敷地8.1haの中に3000戸の高密度の団地が設計条件。くの字型（屏風のよう）に配置し、住棟間にショッピングセンターや小学校・消防署等の公共施設を整備して一つのまちを形成。ピロティや屋上庭園の公共空間を市民に開放し、周囲の環境に配慮。路地裏の雰囲気を取り入れ、ヒューマンスケールの居住性にも気を配る。「建築は人々の幸せのためにある」という大高の理念を紹介。

☆ 基町住宅地区の活性化の取り組み（小林）

平成25年に市が策定した「基町住宅地区活性化計画」に基づき現状と問題点、その対策について紹介。具体的な動きの一つが、若者が主体となってまちの魅力づくりに取り組む「基町プロジェクト」である。「絆」をキーワードに愛着と誇りのある「ふるさと基町」が目標。

☆ パネルディスカッション

（松隈）大高正人の仕事の全体像を紹介する「**建築と社会を結ぶ大高正人の方法**」の展覧会が現在東京で開催中（2月5日まで）。大高は記念碑的な公共建築を残していないので、地味な存在であるが、生活環境を支える社会的な共有財産となる建築を多く手掛けている。

基町高層アパートが抱えている問題は普遍性があり、日本の未来の希望を考えることにつながる。

（藤本）大高は「建築家は社会やまちと正面から向き合わなければならない」と言い続けていた。基町のプロジェクトでは与えられた広島島の戦災復興の終結という諸課題の解決に相当の重圧を感じていた。

建築は未来に残るものだから、未来を見据えた持続可能な対応に力を注いでいる。将来的にはスケルトン（構造躯体）を第3者的な組織が管理し、居住空間を宿泊施設や店舗・事務室等の民間に利用させる方式も有効である。

（石丸）大高が基町高層アパートの設計に注いだ壮大な構想は市民によく理解されていない。研究者としてこの建物の良さを評価し、分かりやすく情報を提供して市民とともに共有できるようにしたい。良さを理解して住みたいと思う人に住んでもらう仕組みができないか。

（松隈）コルビジェ設計の集合住宅には宿泊施設があり、コルビジェ・ファンが泊まって空間を体験できる。基町高層アパートも宿泊できるようにして、市民にも住民にも同アパートの良さを実感してもらえるようにすればよいのではないか。

平和記念公園の資料館から原爆ドーム、中央公園、基町高層アパートまでを一体のエリアとして、戦後の復興から現在、未来を通した価値を評価し、地域で守り、次世代に継承してもらいたい。今は原爆ドームだけが世界遺産になっているが、このエリア全体を景観文化財



(文化的景観)に指定してはどうか。

(石丸) 球場跡地の活用の検討の中で、施設名が先行している。何を作るかの前に議論すべきことは、この空間をどうとらえ、どのような姿にするのがよいかというコンセプトである。それがなければ広島が持っている役割に到達しない。

(藤本) 基町団地は将来的には減築して緑のオープンスペースに戻し、戦後の復興計画時の平和記念公園と中央公園を一体とした公園構想に戻した方がよいと思う。

これだけの緑地を従来のように市が管理するのではなく、市民からの寄付による緑の基金で市民が管理運営できるようになれば、愛着の持てる真の公共の公園となるであろう。

☆ 会場から

(松田) 高層アパートの施工業者の現場責任者。藤本氏に会いたくて東京から参加。工事を契約後、着工までの間に工期短縮の検討や変更金額の調整のため、設計者や発注者と協議した苦労話を懐かしそうに披露。当時の山田市長の工事への理解と熱意に感激。(会場から拍手)

(それに答えて藤本) 山田市長は海外生活の経験が長く、日本のアパートは貧弱なので基町は美しいアパートにして欲しいと議員や職員の前で明言。普通の首長なら前例のない住棟計画は割高につくので拒否する。このアパートがあるのは市長のお陰と言っても過言ではない。

(千代) 広島大学の准教授。学生が大高正人展のために平和記念公園から基町高層アパートまでの模型を作成。学生との議論の中で、同アパートはありふれた近代建築のボキャブラリーが使われているが、しっかりしたコンセプトがあるので熱気を感じた。それが時代のせいかわかからない。コンセプトとは、生きることの根源的な提案である。

☆ まとめ

(松隈) このエリアが持っているメッセージを世界に、未来に向けて発信するための作業を若い世代が担い、このエリアを地域の人とともに大事に育ててもらいたい。

(編集委員 瀧口信二)

○ 瀬戸内の集落の話し (第4回: 沖家室集落と全4回のまとめ)

森保洋之 (広島工業大学名誉教授)

今回は最終回で、沖家室 (おきかむろ) 集落と全4回のまとめの話しです。

【沖家室集落のこと】

■山口県の東南端、周防大島の南に浮かぶのが当地で、行政的には、山口県周防大島町 (旧: 東和町) にあり、JR 山陽本線: 大島から大島大橋を渡り1時間程で沖家室大橋、それを渡ると直ぐが当地である。

島は周囲約5km、面積約1km²で平地が少なく、水が得がたいため、農地は畑である。沖家室大橋直ぐの集落は洲崎、その南東の集落は本浦で、2か所合せて、現在170人程が暮らす高齢者の多い地区である。(図1)



図1 沖家室島の位置と2集落

■当地は、近世初期に伊予河野氏の家臣が沖家室に移り、本集落を拓いたといわれ、その後、当地は、瀬戸内海の海上交通の要地の役割を担う。特に寛永期の参勤交代制度により、九州の大名達が船で兵庫・大坂まで行く途中、当地を寄港地とする。

当地は本陣の必要から、島内の禅寺の泊清寺 (はくせいじ) を浄土宗とし知恩院の直末寺とする願い出が、寛文3年 (1663年) に認められ、以後、本寺は海の本陣とされた。

■当地は、良い漁場・海上交通の要所で、藩は当地を重視し、通過する船の見張り・取調の船役を置く。法令・掟等の掲示の高札場も設け、警護・監視用の番船も置いた。この番船小屋は、御船倉と呼ばれ、その石垣が今も残っている。

■産業は、酒造、鰯網漁が主で、農作物の肥料として鰯が用いられた。一方、16世紀の終り頃、当地に一本釣の漁法と、強く弾力があり半透明で釣糸に適すテグス (天蚕糸) を使った漁とが阿波から入り、これらの釣漁技術により島周辺は漁場となる。

当地漁民は、周辺での漁に加え、出稼ぎ漁も行い、次第に遠方まで出かけるようになった。こうした各地への進出で、当地の人口・戸数・船数は増大し、幕末期や明治期には700戸近くに達し、「家室千軒」と称された。

そして、漁師や雑貨商が朝鮮沿岸や台湾へも出向くようになる。明治18年、政府の斡旋したハワイへの移民が始まると、当地漁民もハワイへ渡り、ハワイ漁場は当地島民が開いたとまでいわれた。

周防大島町西屋代にある現「日本ハワイ移民資料館」は、移民の歴史・労働・生活等を紹介している。一方、第二次大戦の敗戦は、海外出稼ぎ者の引揚げ、戦前の東シナ海漁業の底曳き網漁船の周防灘への侵入等をもたらし、魚類減少と密漁被害甚大化を招いた。

■当地の家々は、漁業の営みから土間を必要とせず、他地域に比べて小規模で、家相互が隣接・密集した景観を形成した。また洲崎集落から本浦まで続く往還道（＝大幹道）と呼ばれる道があり、何軒かの商店がこの道に沿い軒を連ねた。その道巾は一間程度で、人々の生活の息づかいが感じられる路地風の道で、レトロで洒落たショーウィンドも見られた。

往還道から、直角に山側へ向かう道は、ほぼ等間隔で道々が取られ、各道は比較的急勾配の石段や坂である。その両側に石垣が積み、海側に人家、山側に畑が造られた。

全体に集落形成への強い平等意識が見られ、都市計画家が計画したような集落と考えられた。

なお、当地の人々は、水を井戸によって賄い、共同井戸や個別井戸等合わせると、昭和55年頃には50個程と思われ、最古の共同井戸は寛政年代の2か所といえる（**図2**、**写真**）。

■江戸期、長州藩は農民の住居の大きさに制限を加えた。本百姓の下の層の6割以上が漁人である。漁民の多くは貸家住まいで、三軒屋と呼ばれる、三軒続きの長屋の平面をもつ家屋に、漁師の家族が住んだ。元々漁師の家は風呂場を持たない家が多く、殆どの漁師は銭湯を利用した。往時、銭湯は4軒あった。

■昭和34年5月、沖家室は離島振興指定地域に指定され、道路整備・簡易水道整備、更に大島大橋に次いで沖家室大橋も完成した。当地に自動車乗入れが可能になったが、従前の道には自動車は入れず、海を埋立て新しく自動車道路が設けられた。

■毎年盆の時期には、泊清寺住職の尽力もあり、島から外に働きに出た人などが大勢帰省するため、その重みで島が沈む程として、当地は「盆に沈む島」とも呼ばれている。現在、当地には多くの空き家があるが、これらは島を出ていった人が、住んでいた家を売らず、定年後に帰島し、ユツタリと過ごしたいと思う人が多い故と聞いている。

■当地は、2006年に、水産庁の「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」に選ばれている。

■宮本常一氏が編集に参加し、当集落調査結果の記載で有名な『東和町誌』は是非参照されたい。

【全4回の集落の話しのまとめ】

- 研究の目途・思い込み先行から集落に入るのではなく、集落の声を真摯に聞くことから始め、時間を、例えば1集落10年程はかけて、集落を読み解くことが大事である。
- 調査集落は、
 - 地形や風等の厳しい自然環境から、集落独自の生活・空間構成の形成のしくみ（構造）をつくり、守る工夫がなされていた。
 - 集落は独自の再生技術を持ち、絶えず再生を行っている。古い事象で良いものは、残す努力をしつつ、再生技術の継承・伝承、そして、それへの下支えとなる集落持続性の仕組みなどを持っていた。
 総じて、今迄の研究とは異なる、「人・もの・こと・仕組みづくり」に関する新しい地平を、瀬戸内集落は教えてくれた。
- 一つの専門分野だけでは、集落の解説は出来難い。学際的狭間に身を置くことから見えてくる広がり・深さ、その意義の重大さ等々を大事にし、我々は、学際的テーブルに着くことが大事である。その意味では、産学官民による瀬戸内集落研究機構結成への期待大である。

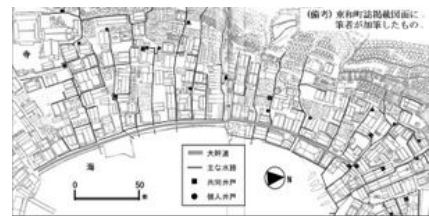


図2 沖家室の本浦集落配置図



沖家室の本浦集落



沖家室の家並み

○ ひろしま市民ひろばの提案！

2011年に広島市中央公園アイデアコンペを終え、地元の建築家として何か提案しなければという思いから、日本建築家協会中国支部広島地域会のまちづくり委員会は、グランドデザイン「ひろしま市民ひろば」をまとめた。これを2013年3月に広島市に報告するとともに各種イベントにおける展示・発表等で多くの意見をいただいた。さらに議論の輪を広げるため、地区別に具体的な提案を順次紹介していく。

ステップ4. Bゾーンに公共建築再編整備

ひろしま市民ひろばのコンセプトとして「世界のこどもに夢を渡せること」と仮説する。

中央公園にある公共施設は下記の通り、いずれも建設後相当年数を経て、いずれ再整備の時期を向かえる。

- ・広島市中央図書館（築後42年）
- ・広島市映像文化ライブラリー（築後34年）
- ・広島市こども文化科学館（築後36年）
- ・広島市青少年センター（築後50年）

仮説としたコンセプトに基づき、これからの図書館を考えてみると、“情報がデジタルである”ことが当然となり、文化を支える文字、映像、絵画、演劇、音楽など多岐にわたるツールを縦横無尽に使いこなし表現する人材が求められてくる。中央図書館はその一翼をになうべく変化が要求される。

映像文化ライブラリーは、地方自治体が設置した我が国最初の施設であるが、これも発展的に世界のこどもに向けて情報発信を拡げるなど期待されている。また、こども文化科学館もすでに先端科学技術の情報や内外の科学館とのネットワークの構築などに大きく遅れをとっており、これからを目指した改革が望まれている。

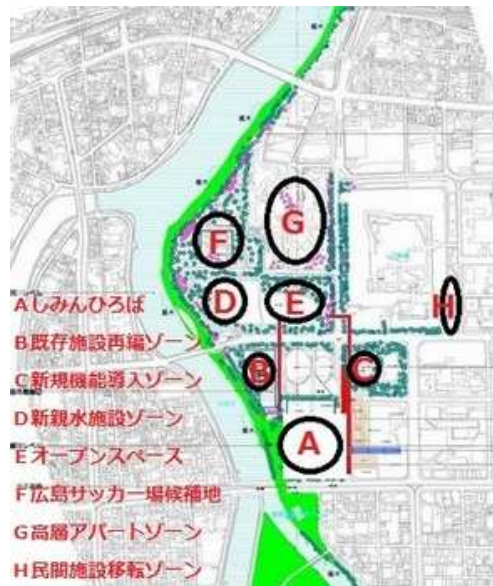
これらは、バラバラに整備するのではなく有機的な機能構成のもとで体系的に考えていきたい。青少年センターもしかりである。

美術や映像、文学や演劇、音楽の文化芸術の活動拠点であると同時に、世界のこどもがこれらの最先端のメディアを通じて世界の施設とネットワークにより繋がって、自由に情報のやりとりができ、使いこなせるようになる施設群としてイメージする。

右図は、中央公園のグランドデザインを意識した総合文化芸術システムの施設イメージである。

①元安川にそれぞれの場面で開かれており、南に原爆ドームを意識させる雁行した配置とし、各施設群はユニバーサルに快適な動線で結ばれている。

②地上は3階程度の低層とし、和風のデザインとする。



全体のゾーニング計画案



Bゾーンの配置計画案

- 1：日本文化ラボ
- 2：メディアラボ
- 3：こども科学ラボ
- 4：芸術表現ラボ



名古屋市科学館



仙台メディアテーク

(日本建築家協会広島地域会まちづくり委員会 前岡智之)

○ こまちなみシリーズ ⑭

金沢市はまちの歴史を色濃く残した、ちょっとした町並みを「こまちなみ」として守り、育てるまちづくりを進めている。これに倣って、広島における残しておきたい「こまちなみ」を探訪し、シリーズで紹介してきたが、市内周辺から広島県内に対象を広げていく。

城下町・東城まちなみ(庄原市)

昨年10月中旬、庄原市東城町を目指してマイカーで自宅を出た。中国山地の紅葉はまだ少し早い。途中、三次盆地の雲海に驚いたが、ライトを点灯して無事に通過。10時過ぎには目的地、**東城まちなか交流施設「えびす」**へ到着。平成23年開館した市民交流・まちづくり活動拠点で、観光案内や地元工芸品などの販売もしている。(木曜定休日)

砂鉄と木炭が豊富で、東城は古くから「東城・西城くろがねどころ」と謳われた鉄の集散地。江戸期以降には東城浅野家の城下町として商工業が発展し、東城街道や有栖川(正式名:成羽川)を利用した水運で倉敷へ物資が運ばれた。街並みも整備され城下町の面影を残した宿場町としても栄えた。

●「三楽荘」(旧保澤家住宅)(平成23年1月、国登録有形文化財)

三楽荘は、明治期に東城の名匠と言われた横山林太郎棟梁により建てられ、東城のまちなみ景観の代表的な町家。建築当時、当主は呉服商・醸造業を生業としていた。昭和24年、旅館業へ転業し以後60年間旅館「三楽荘」として親しまれてきた。現在、庄原市が寄贈を受け歴史文化施設として活用している。旬の食材を使った郷土料理もあり、日本庭園に面した離れ座敷で味わうことが出来た。

(@1,500円、要予約)

「三楽荘」の命名は「君子の三つの楽しみ」<孟子>説、「人が願望む三つのもの」<論語>説などがあるが定説はないようだ。

●「東城まちなみ散歩ギャラリー」と伝統行事「お通り」

古い町並みを丸ごと美術館にするイベントが毎年、「帝釈峡」の紅葉シーズンに合わせて開催される。旧城下町の風情が残る町家が、期間限定のギャラリーに早変わり。藍染の刺し子のれんが下がる軒先をくぐると、和服姿の東城美人が笑顔で迎えてくれるそうだ。ギャラリーには各家のお宝や芸術作品が展示され、地域の特産品なども販売される。期間中の一日(文化の日)は、大名行列・武者行列を再現し400年の伝統行事「お通り」が商店街を練り歩く。子ども達が背負う「母衣(ほろ)」は300年前の記録に残り全国でも珍しい。

●(株)ヤマモトロックマシン・東城工場(平成28年2月、国登録有形文化財)

昭和7~13年に建てられた、削岩機メーカーの木造施設群(工場と家族・独身寮)。工場は教会を連想させるレトロなデザインで、内部は栗材の柱が規則正しく並び神々しい空間。屋根裏の木造トラス構造も力強く美しい。

大正末期に近隣でダム建設工事があった際、外国製削岩機の修理を引き受けたのが契機となり、独自の削岩機を開発。これがヒット商品となり会社は急成長を遂げる。その頃に建てられて現役で残る木造施設群は、県内有数の優れた産業遺産でもある。(原則非公開、年数回の見学日に再訪問した)

●「東城まちなみ保存振興会」の活動

東城町は平成の大合併で単独町制か合併かでもめたあげく、平成17年3月庄原市に移行した。合併により拍車のかかる「街なかの空洞化」を食い止めようと、商店街の店主が中心とな



案内図



築125年の「三楽荘」本館



「お通り」の「母衣」行列



教会を連想させる木造の工場

り、合併して直ぐに保存振興会を立ち上げた。「ひな祭り」や「まちなみ散歩ギャラリー」開催、「三楽荘」の活用など地域活性化に大きな成果を上げてきた。平成20年度中国地域づくり事業報告会では「大賞」を受賞している。

丁度10年経過して振興会組織の高齢化が進み、若手後継者の育成・参加が大きな課題となっており厳しい現実もある。
(編集委員 高東博視)

○ 読者からの投稿

T. T. (匿名希望)

メルマガ前号のアンケートで県庁について書いたので、「たてものがたり」の県庁見学会に行って来ました。なかなか面白かった。「公共建築百選」に入っているだけあり、意匠など興味深いものがありました。杭を打たずに建物を浮かせているというのも驚きです。建築費を抑えるため、掘削する地盤の土の重さと建物の重さを同じにすれば沈まない？という考え方だそうです。廃墟からの復興のなか、当時の関係者の意気込みと努力が感じられます。現在築60年。県の担当者によれば今後耐震工事をし、後20～30年は使い続けるということです。その後も、保存活用ができれば面白いと思います。敷地の緑地はもっと市民・県民に親しまれる場所になれるのでは。

なので、ここでホテルは当面ないということになります。しかしどこかにラグジュアリー系のホテルは欲しいところです。隠れ家ホテルのような小規模で個性的なモノもあっていい。最近市内中心部のホテル建設のニュースが多いですが、バリューゾーンねらいのものばかりのようです。

勝手な提案ですが、土橋の中国新聞が建て替えや移転されるなら、ぜひホテルを検討して頂きたい。印刷部門は商工センターへ移り、ホールや以前あったレストランも今は活用されてないようですし、現状でも空きスペースはありそうです。リノベーションの手もあります。ホテルには改装しにくそうです。建て替えの際に下層階はモールやオフィス、中層は新聞社、高層階(と言っても20階程度まで)にホテルというのもありそうです。なにせ本川を挟んで平和記念公園という立地は魅力です。安易に分譲マンションというのは勘弁して頂きたい。可能ならば周辺区画も含めて再開発ができれば魅力が増すのですが、難しいでしょうね。

□ 編集後記

お元気で新しい年をお迎えのこととお喜び申し上げます。皆さんにとりましてより良い年(都市)になりますよう！

ひろしまも復興72年目を迎えました。このメルマガを通じて出会えた多くの方々とお会いして、たくさん語り合えたらいいなあと夢を描いています。

そうだ！今年は、旧広島市民球場跡地を利用して市内各地区で行われているまちづくり活動団体が一堂に会して“まちづくりフェスティバル”をやろう！その時は、子どもたちにも集まってもらってひろしまの明日を描いてもらおう！などなど夢は広がります。

と言ったのは去年のこと。夢を現実に、前に向かって進め！進め！進め！

今年もどうぞよろしく願いいたします。
(編集委員 前岡智之)

***メルマガを読まれたの感想や質問及びひろしまのまちづくりについて
皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！
(投稿は500字程度以内でお願いします)**

編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
高東博視	心豊かな家庭環境をつくる広島21理事
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表
三宅恭次	元中国放送役員